

宗麟 ザビエルを招く

宗麟は21歳の時、キリスト教への関心と南蛮貿易推進のため、山口にいたキリスト教の宣教師フランシスコ・ザビエルを府内に招きました。彼はザビエルを歓迎し、府内でキリスト教を広めることを許可しました。

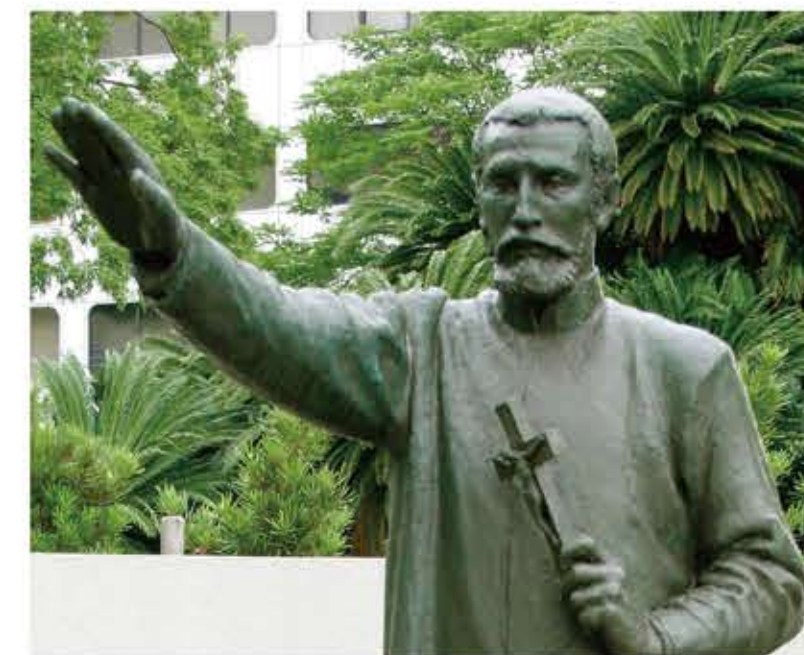


「豊後大名大友宗麟に拝謁する聖フランシスコ・ザビエル」
(ヴァン・ダイク作 17世紀初)

ヨーロッパに知られた「宗麟」

ザビエルとの出会いは、宗麟、そして大分にとって、新しい歴史の扉が開かれた瞬間でした。後にキリスト教の信者となった宗麟は、宣教師によって、キリスト教を熱心に保護した「豊後王」としてヨーロッパに伝えられました。

ドイツの城に「宗麟とザビエルの出会い」をイメージした左の絵が飾られています。右の人物が宗麟(21歳)、左がザビエル(45歳)です。当時のヨーロッパで絵に描かれた日本人は、織田信長でも豊臣秀吉でもなく、宗麟でした。



「聖フランシスコ・ザビエル像」(大手公園)
ザビエルは、2ヵ月後にインドに旅立ちますが、その後多くの宣教師が府内を訪れ布教活動を行いました。

教会に響いたビオラの音色

宗麟から土地を与えられた宣教師たちは、そこに教会(ダイウス堂)を建てました。ここでは、ビオラ(バイオリンの一種)の演奏、日本人による初めての合唱や演劇も行われました。



「西洋音楽発祥記念碑」(県庁前)

「豊後」は特別な地

ティセラ(ポルトガル人)の描いた地図には、①「豊後」、②「日出」、③「府内」、④「佐賀関」、⑤「臼杵」など大分の地名が詳しく記されています。また九州に大きく「BVNGO」(豊後を意味する)の文字が見られます。この地域は、宗麟の支配が及んだ特別な地としてヨーロッパに紹介されていました。



ティセラ

